

## 高等学校「古文」授業における文化史的観点導入の試み —謡曲《頼政》を例として—

源 健一郎

高等学校における新カリキュラム科目「古典B」における授業実践案を提示する。古典文学研究の現代的問題意識を、高等学校における古典学習に活かす試みでもある。今回は文化史的観点を導入しながら、謡曲《頼政》の読みを深めることを目的とする構成である。生徒たち自身が主体的に考え、調べ、実感することのできる内容となるよう心がけた。1・2節において、学習指導要領との関連、及び古典文学研究との関連について述べた後、3～7節において、導入・展開・総括に区分した授業案について概説する。

キーワード：古典文学、国語教育、謡曲、平家物語

### はじめに

日本古典文学研究において、ある作品の原態や古態を追究することは、ながらく最も重要な課題であった。流動・変容を繰り返す本文が版本化され、ある程度固定化する近世以前を対象とする中古・中世の古典文学研究において、その傾向は顕著であった。そうした動向は、中学校・高等学校の古文教材に、精選された規範的作品、いわゆるカノン<sup>1)</sup>を掲載する上で有意義ではあったが、一方で、教科書に載る作品が、成立したとされる時代にのみ固着するもののように扱われがちで、後の時代における享受や影響については等閑視される面もあったのではなかろうか。

ある一つの作品は、それ以前の作品からどのような影響を受けて成立したのか、また、後の時代において、どのようなイメージで享受され、意味づけし直されながら、現代にまで伝えられるようになったのか。そうした文化史的観点を導入することで、生徒たちは、多角的な視点をもって古典を学習する機会を持ちえるであろう。本稿においては、そうした学習機会が提供できるような授業案の考察を試みたい。

また、生徒たちの主体的参加を促し、作品理解をより深めるために、音読・朗読の活用と、コンピューター検索による調べ学習も積極的に取り入れたい。

### 1 学習指導要領との関連

本授業案が授業実践を想定しているのは、「古典B」である。高等学校学習指導要領には、「古典B」の目標として「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育

てる。」(第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」1「目標」)と掲げられる。本稿の試みは、このうち、特に下線部の内容に呼応する授業案となる。

本授業案のポイントは、以下に挙げた①～③の3点である。それぞれが学習指導要領、および同解説<sup>2)</sup>とどのような関連をもつのかについて示しておきたい。関連の深い内容には下線を付しておいた。

①謡曲《頼政》を読解するために、事典類から情報を得たり、成立の前提となった『平家物語』本文と読み比べたりすること。

【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」2「内容」

(1) 次の事項について指導する。

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

(2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

イ 同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。

第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」3「内容の取扱い」

(4) 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文種や形態、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。

【学習指導要領解説】

国語編第2章第6節「古典B」1「性格」

「古典A」における指導が、特定の文章や作品、文種や形態などについてまとまりのあるものを中心として行われるのに対して、「古典B」では、ある程度幅広く古典を取り上げ、かつ言語文化の変遷について理解を深めることとしている。

「国語総合」や「古典A」における古典に関する指導には、授業時数や教材の点でおのずと限りがある。したがって、「古典B」において様々な教材を系統的に取り上げ、ある程度幅広く指導することは、古典を読む能力を養い、古典についての理解や関心を深める上で効果的であるとともに、古典の価値について考えを深め、我が国の文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係などについて考える上でも有効である。

国語編第2章第6節「古典B」3「内容」

(1) 指導事項

エ 古典を読み味わい、作品の価値について考察することに関する指導事項

「作品の価値について考察する」とは、時代の変遷の中で様々な評価を受けつつ読み継がれてきた作品の価値について認識することである。小学校、中学校及び「国語総合」と一貫して学んできた古典の学習を踏まえ、古典の原文のみならず、古典についての評論文なども活用して、古典の普遍的価値や、その作品が古典として現代まで読

み継がれてきた意味について考えることが大切である。

(2) 言語活動例

イ 読み比べたことについて説明する言語活動

「読み比べ」することで、生徒は、文章を課題意識をもって主体的に読むことができる。「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章など」は、読み比べる文章を選ぶ視点を例示している。例えば、書かれた時代は異なるが、同じ題材を取り上げた文章を読み比べることで、時代を超えて我が国の文化の底流にある、ものの見方、感じ方、考え方に触れることができる。一方、同じ時代に同じ題材を取り上げた文章を読み比べることで、文章から受けるイメージの違いを感じ取ったり、書き手の意図による違いを見いだしたりすることもできる。さらに、読み比べたことについて「説明する」ためには、分かったことや考えたことをまとめることも必要となり、一層文章の理解を深めることにつながる。

国語編第2章第6節「古典B」4「内容の取扱い」(4) 教材に関する事項

ア 取り上げる教材

「言語文化の変遷について理解を深める」は、例えば、古事記、日本書紀、万葉集など漢字のみを用いて表記された作品から仮名文字が用いられるようになった作品へといった文字表記の変遷、女性文学から隠者文学、庶民文学へといった文学の担い手と思潮の変遷などを理解したり、軍記物語の文体に漢文訓読の影響を見いだしたり、俳諧の学習においてその成立に至るまでの和歌、連歌の歴史を通観したりというように、読むことの学習と関連して言語文化の変遷について理解を深めるということを示している。(中略)

「長短や難易などに配慮」するとは、短く平易なものがよいということではない。ある程度まとまった量の教材を読むことで、古典を読む能力が養われるという側面もある。古典を読む能力を養うためには、生徒の発達の段階や指導の時期に即応して、長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。

②舞台芸術としての謡曲のリズムを実感するために、朗読に力を入れること。語り物である『平家物語』のリズムと比較してみること。

【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」3「内容の取扱い」

(2) 古典を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れるようにする。

【学習指導要領解説】

国語編第2章第6節「古典B」4「内容の取扱い」

(2) 音読、朗読、暗唱に関する事項

これまでの「古典」では、音読、朗読、暗唱については、言語活動例として示していた

が、今回の改訂では内容の取扱いに示している。

このことについては、活動そのものが目的となることがないように、「古典を読み深めるため」ということに留意する必要がある。音読、朗読、暗唱などをすることは、古典の理解を一層進めるとともに、それを生徒相互が確認するためにも効果がある。

③文化史的状況を理解するために、インターネットによる情報を活用すること。またそれを通して、文章だけでなく、絵画を通じて視覚的にも理解を深めること。

【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第1「国語総合」2「内容」C「読むこと」

(1) 次の事項について指導する。

オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。

(2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

イ 文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。

第2章第1節「国語」第3款「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」

2 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(3) 音声言語や画像による教材、コンピュータや情報通信ネットワークなども適切に活用し、学習の効果を高めるようにすること。

【学習指導要領解説】

国語編第3章「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」

2 内容の取扱いについての事項

(2) 学校図書館の計画的な利用、読書推進、情報活用

「読書意欲を喚起し幅広く読書する態度を育成する」の「読書」とは、文学的な文章のみならず幅広い分野にわたって本や文章を読むこと、様々な学習活動の中で必要な本や文章を読んだり調べたりすることを指す。幅広く読書しようという意欲を喚起するためには、学校図書館にある図書資料を利用するだけでなく、学校図書館にない図書資料がどこにあるかをインターネットで検索して、図書資料の豊かさを実感させたり、生徒のそれまでの読書生活を踏まえ、読む分野に偏りがないう適切な図書を推薦したりすることなどの指導の工夫をする必要がある。

「情報を適切に用いて、思考し、表現する能力を高める」とは、課題を解決するために必要な情報を検索、収集し活用する能力を一層養うことである。その際、学校図書館の図書資料などから必要な情報を入手するだけでなく、必要に応じて、連携している地域の図書館などを利用したり、学校図書館に設置されたコンピュータでインターネットを利用したりすることなども、学校図書館のもつ機能を活用することであると認識する必要がある。

### (3) 教材・教具の適切な活用

「音声言語や画像による教材、コンピュータや情報通信ネットワークなども適切に活用し、学習の効果を高める」とは、教材、教具の適切な活用について述べたものである。国語科はとかく文字言語だけを教材としがちであるが、それだけではなく、音声言語や映像による種々の教材、また、コンピュータや情報通信ネットワークなども適切に活用して、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの全般にわたって学習の効果を高めるようにする必要がある。

## 2 日本古典文学研究の動向との関連

本稿「はじめに」に示したような古典文学研究の状況は、実は現在のものとはかなり異なる面がある。むしろ、原態や古態を探る研究の意義が失われたわけではないが、一方では、作品に対する注釈活動が、後世の文学に大きな影響を与え、時に人々の通念や認識を形成していたことが明らかにされるなど、従来の文学の枠組みでは捉えきれない分野にも注目されるようになって<sup>3)</sup>。そうした研究の対象となる作品のジャンルは、『古今和歌集』『源氏物語』から中世軍記物語等に至るまで広範囲に及び、時代的にも中古・中世から近世にまで至る。原態週及的に時代に固着するかのように理解されていた作品理解が、作品やジャンル、時代を横断して理解されるようになってきたと言えよう<sup>4)</sup>。

原典としての古典作品は、必ずしもそのまま忠実に享受され続けていたわけではなく、時代を経るにつれて、様々に再解釈され続け、近世に至ると原典から逸脱し、自由な再創造さえ行われた。現代を生きる私たちの古典作品に対する認識は、原典の成立時にそれに触れた人々と同じではありえない。その間に横たわる時代のなかで広がった作品イメージをフィルターとしているのである。

こうした見方は、一方で、一九八〇年代以降、日本文学研究にも取り入れられた欧米における文化研究理論、カルチュラル・スタディーズの方法論にも重なり合う面がある<sup>5)</sup>。カルチュラル・スタディーズには批判もあるが、文化史的背景にテキストを埋没させず、その個性を尊重する構えを持つ限りにおいて、有効なものであると考えられる。

本授業案で取り上げる謡曲《頼政》を通じて、まずは生徒たちには、本説である『平家物語』からの再解釈・再創造の産物として、作品の位置づけを把握するよう導きたい。その上で、《頼政》成立後に、主人公たる頼政がどのようなイメージで捉えられるようになったかを確認させていく。その結果として、生徒たちが、江戸時代の人々が経験したであろう《頼政》の読み解きの一端を追体験できたとすれば、本授業案の目的は達せられることになる。

## 3 導入一源頼政像についての調査

通常、ある作品を取り上げる際には、その作品のジャンルや成立背景、作者などについて概説して導入とすることが多い。しかし、本授業案の場合、「源頼政」という人物に関するイメージの多様性を読み取っていくことが重要である。そこで、まずは頼政の人物像について、その大枠を生徒たちに理解させたい。

そのために有用な学習は、やはり事典（辞典）類の活用であろう。インターネットの検索に頼ると、玉石混淆、雑多な情報が膨大に取得されることになってしまい、かえって弊害が大きいだろう。以下に、高等学校や一般公共の図書館類で容易に利用できる事典類の記事を挙げておく。

『国史大辞典』「源頼政」

一一〇四～八〇 平安時代後期の武将、歌人。通称源三位頼政。長治元年（一一〇四）生まれる。仲政の子で、母は藤原南家友実の女、摂津源氏の始祖頼光から五代にあたり、摂津国渡辺（大阪市東区）を本拠とした。早くより朝廷に出仕し、白河院の判官代を経て保延二年（一一三六）に蔵人・従五位下となる。久寿二年（一一五五）兵庫頭。保元元年（一一五六）の保元の乱には源義朝らとともに大半の源氏一族とは別に後白河天皇方に属した。同三年には二条天皇即位の時に狂人を捕らえた功績によって院昇殿を聴される。この翌年ようやく従五位上へと昇進した。平治の乱においては義朝の勧誘によってはじめ藤原信頼側に属するも、保元の乱で義朝が父や弟と対立しており、ために人望を失うことを恐れてほどなくして離反した。清和源氏とはいえ中央官界での生活の長い頼政らしい決断であったといえよう。二条天皇が平清盛の六波羅第に入ったことを知って頼政もあとを追ひ、藤原通憲・清盛側に属するところとなった。天皇の六波羅第入りを知った義朝の追撃を六条河原で防ぎ、源氏でありながら平氏に付くのは恥辱ではないかとの義朝の非難に対して、弓箭をもって皇家に仕えるのが務めであり天皇に弓ひく義朝こそ叛臣であろうと応じたという（『平治物語』）。乱後も官位の昇進はなく内昇殿も聴されず、和歌に託して思いを述べたところようやく許可されたといい（『源平盛衰記』）、仁安元年（一一六六）に正五位下となった。こののちの官位の昇進は順調で、仁安二年従四位下、同三年従四位上、嘉応二年（一一七〇）右京権大夫、承安元年（一一七一）正四位下と経て、治承二年（一一七八）に従三位・非参議となった。この昇進は頼政七十五歳のときであって、武家流源氏出身の人物としては異例のものであった。清盛が頼政の老年であることを憐れみ、源氏は多く逆賊となるも頼政ひとり資性正直勇名の聞こえ高いとして強く三位への昇進を進言したという。翌三年に出家し、法名は真蓮または頼円。清盛の後白河法皇幽閉、公卿の大量解官事件（治承三年のクーデター）直後のことである。同四年の以仁王の挙兵では王に属して清盛と対立した。しかし延暦寺・園城寺を味方につける策も成功せず、南都興福寺を頼って京都を脱出。その途中の宇治で平氏軍の追撃をうけ、宇治橋を撤去して抗戦するも敗れ、五月二十六日平等院で自殺した。七十七歳。寺内の扇の芝がその場所と伝えられている。歌人としても著名で、院政期歌壇に重きをなした。藤原清輔・藤原俊成などと交流をもって歌会などを催しており、『新古今和歌集』『千載和歌集』などの勅撰和歌集に六十余首が採録されている。自撰歌集の『源三位頼政集』もあって、当寺の京都朝廷においては武将としてよりも歌人としての評価のほうが高かったともいえる。なお宮中では夜鳴く怪鳥鶴（ぬえ）を退治したという伝説をもつが異伝が多く、いかなる歴史的事実にもとづくものか確定しがたい（『大日本史』列伝）。（井上満郎）



『日本古典文学大辞典』「源頼政」

平安時代の歌人。通称源三位頼政。(中略)【作風】鳥羽・後白河の院政下、平家の権力の擡頭・増大する中に、清和源氏の一員として、不遇をかこつ傍觀者的存在ながら、天性の歌人らしく多数の歌をのこし、老齡を忘れさせる活動をしたことは注目に値する。『無名抄』によれば、俊恵・藤原俊成にその数寄ぶりを賞賛されている。(中略)歌風は一般に明るく自由で、新鮮な自然觀照も見られる。〔森本元子〕

『平家物語研究事典』「頼政」

底本(筆者注、『平家物語』)では、(中略)治承四年(一一八〇)の以仁王を擁しての挙兵までの経過とその結果を語る部分(巻四の「源氏揃」「競」「橋合戦」「宮御最期」「鶴」)において、事件の中心的人物として描かれている。それによると、頼政は近衛河原に住んでいたが、名馬木の下をめぐつての息仲綱と宗盛との争いを見て、平家が源氏を嘲弄することに対して腹をすえかねて、以仁王の御所を訪れて謀叛を勧めた。以仁王は相少納言伊長の觀相を聞いて心動き、平家追討の令旨を發した。五月十六日の夜、館に火を放って三井寺へ参り、先に同寺に入っていた以仁王と合流した。五月二十三日、三井寺を出て、奈良へ向かい、二十六日平等院の合戦に敗れて、〈西にむかひ、高声に十念となへ、最後の詞ぞあはれなる。埋木の花さく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける これを最後の詞にて、太刀のさきを腹につきたて、うつぶささまにつらぬかつてぞうせられにける〉(四・宮御最期)という死を遂げた。長七唱がその首を取って宇治川に沈めたという。「鶴」では、頼政の家系を述べた後、述懐の和歌を詠んで昇殿を許され、同じく和歌により従三位に叙せられたことを語り、次いで〈此人一期の高名とおほえし事〉として、近衛天皇在位の仁平年間、鶴に似た変化を退治したこと、二条天皇在位の応保年間、鶴を退治したことを語る。この話はいずれも連歌を伴っている。源平盛衰記には、この他、四の題を隱題にして一首の歌を詠んだこと、鳥羽院の女房菖蒲前を賜ったことなどを語り、「伊豆守仲綱は、即菖蒲が腹の子也」(十六・菖蒲前事)と語る。以上のごとく、和歌に関係する説話が極めて多い。平家物語以外には、「保元物語」「平治物語」にも登場する。(久保田淳)

以上のように、歴史系と文学系の事典を合わせ見ることが重要である。その結果、次のような観点を生徒たちと共有しておきたい。

- (1) 平氏全盛、源氏不遇の世の中で、辛抱強く、思慮深く振る舞い、官位昇進を果たし、長命を保った人物であること。
- (2) にもかかわらず、不遇の皇子とともに反平氏の兵を挙げ、宇治平等院で自害に追い込まれたこと。
- (3) 不遇の中での昇進には、和歌の才能が功を奏したこと。
- (4) 和歌の腕前は、化け物退治の逸話や、辞世の歌にまつわる伝承として、『平家物語』の中に語られ続けたこと。

こうした観点を確認した上で、本授業では、文字化されたテキスト(謡曲)が音声化され、

人が演じることで視覚化される総合的舞台芸術、能を取り上げることの意義を、生徒たちに伝えておきたい。能という芸能は、権力者に庇護された室町期以降、近世・近代に至るまで、庶民層から権力者層に至るまで広く好まれ、それ故、歴史的人物に対する人々のイメージ形成に大きな役割を果たしたメディアである、というのがその意義である。

#### 4 展開（１）一謡曲《頼政》の読解

頼政の人物像について、ある程度の理解が深まったならば、謡曲《頼政》の読解に進みたい<sup>6)</sup>。とはいえ、本文すべてを限られた授業時間数の中で取り上げることはできない。必要最低限と思われる箇所を摘記した試案を以下に示しておく。

なお、本文の読解に入る前に、《頼政》が能という芸能を大成した代表的作者、世阿弥によるものであること、近代・現代に至っても盛んに演じられる演目の一つであること、以上の２点は確認しておく必要がある。

##### 謡曲《頼政》

〔前場〕（旅僧姿のワキが登場。）

ワキ「これは諸国一見の僧にて候。われこの程は都に候ひて、洛陽の寺社残りなく拝み廻りて候。またこれより南都に参らばやと思ひ候。天雲の、稲荷のいなり やしろ社伏し拝み、稲荷の社伏し拝み、なほ行末は深草や、木幡こわたの関を今越えて、伏見の沢田見え渡る、水のみなかみ水上尋ね来て、宇治の里にも着きにけり、宇治の里にも着きにけり。」

（中略…老翁姿のシテ、ワキに呼びかけながら登場。シテがワキに宇治の名所を教える。）

シテ「いかに申し候。この所に平等院と申す御寺の候、御覧ぜられて候ふか。」

ワキ「不知案内の事にて候ふほどに、いまだ見ず候、御教へ候へ。」

シテ「此方へ御出で候へ。これこそ平等院にて候へ。またこれなるは釣殿と申して、面白き所にて候、よくよく御覧候へ。」

ワキ「げにげに面白き所にて候。またこれなる芝を見れば、扇のごとく取り残されて候ふは、何と申したる事にて候ふぞ。」

シテ「さん候、この芝について物語の候、語つて聞かせ申し候はん。昔この所に宮戦ありしに、源三位頼政、合戦にうち負け、扇を敷き自害し果て給ひぬ。されば名将の古跡なればとて、扇のなりに取り残して今に扇の芝とも申し候。」

ワキ「いたはしや、さしも文武に名を得し人なれども、跡は草露さうろうの道のべとなって、行人征馬の行方のごとし。あら、いたはしや候。」

シテ「げによく御弔ひ候ふものかな。しかもその宮戦の月も日も、今日に当たりて候ふはいかに。」

ワキ「何と宮戦の月も日も今日に当たりたると候ふや。」

シテ「かやうに申せばわれながら、よそにはあらず旅人の、草の枕の露の世に、姿見えんと来たりたり。現うつとな思ひ給ひそとよ。」

地謡「夢の憂き世の中宿なかやどの、夢の憂き世の中宿の、宇治の橋守年を経て、老の波もうち渡



す、遠方<sup>をちかた</sup>人に物申す、われ頼政が幽霊と、名のりもあへず失せにけり、名のりもあへず失せにけり。」

[中入]

[後場] (中略…老体の武将姿の後シテが登場。ワキの旅僧は頼政を弔う経を読んでいる。)

シテ「あら尊<sup>たつと</sup>の御事や。なほなほ御経読み給へ。」

ワキ「不思議やな、法体<sup>はつたい</sup>の身にて甲冑を帯し、御経読めと承るは、いかさま聞きつる源三位の、その幽霊にてましますか。」

シテ「げにや紅<sup>くれなゐ</sup>は園生<sup>そのお</sup>に植ゑても隠れなし。名のらぬさきに、頼政と御覧ずるこそ恥づかしけれ。ただただ御経読み給へ。」

ワキ「御心安くおぼしめせ。五十展転<sup>てんでん</sup>の功力<sup>くりき</sup>だに、成仏<sup>てんぶつ</sup>まさに疑ひなし。ましてやこれは直道<sup>ちきだう</sup>に、」

シテ「弔ひなせる法の力、」

ワキ「合ひに合ひたり、所の名も」

シテ「平等院の庭の面<sup>おも</sup>」

ワキ「思ひ出でたり、」

シテ「仏<sup>ぶつ</sup>在世<sup>ざい</sup>に、」

地謡「仏の説きし法<sup>はふ</sup>の場、仏の説きし法<sup>はふ</sup>の場、ここぞ平等大慧<sup>だいゑ</sup>の、功力に頼政が、仏果<sup>ぶつぐわ</sup>を得んぞありがたき。」

シテ「今は何をかつつむべき、これは源三位頼政<sup>げんざん み</sup>、執心<sup>しふしん</sup>の波に浮き沈む、因果の有様あらはすなり。」

(中略…高倉宮<sup>もちひと</sup>以仁王を奉じて、反平家の挙兵をしたものの、逆に追い詰められ、宇治川で最後の合戦をした様子が語られる。)

シテ「忠綱<sup>つはもの</sup>、兵を下知して曰く、」

地謡「水の逆巻く所をば、岩ありと知るべし、弱き馬をば下手<sup>したで</sup>に立てて、強きに水を防がせよ、流れん武者には弓矢<sup>ゆはず</sup>を取らせ、互ひに力を合わすべしと、ただ一人の下知<sup>いちにん</sup>によって、さばかりの大河なれども、一騎も流れずこなたの岸に、喚<sup>おめ</sup>いて上がれば味方の勢は、われながら踏みもためず、半町ばかり覚え<sup>しき</sup>ず退って、切っ先を揃へて、ここを最期と戦うたり。さるほどに入り乱れ、われもわれもと戦へば、」

シテ「頼政が頼みつる、」

地謡「兄弟の者も討たれければ、」

シテ「今は何を<sup>こ</sup>か期すべきと、」

地謡「ただ一筋に老武者の、」

シテ「これまでと思ひて、」

地謡「これまでと思ひて、平等院の庭の面、これなる芝の上に、扇をうち敷き、鎧脱ぎ捨て座を組み、刀を抜きながら、さすが名を得しその身とて、」

シテ「埋もれ木の、花咲く事もなかりしに、身のなる果ては、あはれなりけり。」

地謡「跡<sup>あと</sup>弔ひ給へ、御僧よ、かりそめながらこれとても、他生の種の縁に今、扇の芝の草

の蔭に、帰るとて失せにけり、立ち帰るとて失せにけり。」

新編日本古典文学全集『謡曲集 一』(小学館)<sup>7)</sup>

読解の手順としては、ごくオーソドックスな取り組みでよいだろう。主人公たる頼政の人物像やその心情に焦点化するものである。夢幻能、修羅能の形式についての解説を通じて、亡者の語りによって、本作品が構成される点も押さえておきたい。作品の主題が、戦乱における頼政の死と、それに伴う往生の不可能性にあることを理解するためである。

また、芸能としての文体のリズム、緊張感を体感させるために、音読指導には力点を置きたいところである。シテとワキを特定の生徒に、地謡をその他の生徒全員で読むなど、能の雰囲気を出せるだけ再現する工夫があつてよい。次節では、本説たる『平家物語』を取り上げる。琵琶法師の一人語りである『平家物語』と、複数の語りが交錯する謡曲との文体との違いも、声に出して読むことによって実感できることになるであろう。

## 5 展開(2) —《頼政》の本説『平家物語』の読解

《頼政》の本説である『平家物語』を取り上げる。前節で述べたように、芸能としての文体の違いを理解するため、音読指導はしっかり行いたい。

### 『平家物語』巻第四「頼政最後」

源三位入道は、長絹の直垂に、科革<sup>ひたれ</sup> 緞<sup>しな</sup>の鎧着て、「いまを最後」と思はれければ、わざと兜は着給はず。嫡子伊豆守仲綱は、赤地の錦の直垂に、黒糸緞の鎧着て、「弓をつよく引かん」とて、これも兜は着ざりけり。

橋の行桁<sup>ゆきげた</sup>を浄妙が渡るを手本にして、三井寺の悪僧、渡辺の<sup>つはもの</sup>兵ども、走り渡り、走り渡り、戦ひけり。ひっ組んで川へ入るもあり、討死<sup>うちじに</sup>する者もあり。橋の上のいくさ、火の出づるほどこそ見えにけれ。

先陣上総守忠清、大将に申されけるは、「橋の上のいくさ、火出づるほどになりて候。かなふべしともおぼえ候はず。今は川を渡すべきにて候ふが、をりふし五月雨のころにて、<sup>みずかさ</sup>水量はるかにまさりて候。渡すほどにては、馬、人、押し流され、失せなんず。淀、<sup>いも</sup>一口<sup>あらひ</sup>へや向かひ候ふべき、河内路をやまはり候ふべき」と申せば、下野<sup>しもつけ</sup>の国の住人、足利の又太郎すすみ出でて申しけるは、「おおそれある申しごとにて候へども、悪しう申させ給ふ上総殿かな。目にかくる敵をただいま討ちたてまつらで、南都へ入らせ候ひなば、吉野、<sup>とづかは</sup>十津川とかやの者ども参りて、ただいまも大勢にならせ給はんず。それはなほ御大事にて候ふべし。」(中略)

足利、大音<sup>だいおんじょう</sup> 声<sup>こゑ</sup>をあげて下知しけるは、「強き馬<sup>うはて</sup>をば上手に立てよ。弱き馬<sup>したて</sup>をば下手になせ。馬の足のおよばんほどは、手綱<sup>たづな</sup>をくれてあゆませよ。はづまば手綱かい繰って泳がせよ。肩をならべて渡すべし。馬のかしら沈まば引きあげよ。いたう引いて、引きかつぐな。馬には弱く、水には強くあたるべし。敵射<sup>しころ</sup>るとも、あひ引きすな。つねに鎧<sup>よろい</sup>をかたぶけよ。あまりにかたぶけて、天辺<sup>てへん</sup>射<sup>や</sup>すな。かねに渡して、あやまちすな。水にしなひて、渡せ

や、渡せ」と下知をして、三百余騎を一騎も流さず、むかひの岸にざっと渡す。(中略)

そののち、大勢川を渡して、平等院の門のうちへ、攻め入り、攻め入り、戦ひけり。

宮を南都へ先立てまゐらせて、三位入道以下残りにとどまって、ふせぎ矢射けり。三位入道、八十になりていくさして、右の膝口射させて、「今はかなはじ」とや思はれけん、「自害せん」とて、平等院の門のうちに引きしりぞく。敵追つかくれば、次男源大夫判官兼綱、紺地の錦の直垂に、緋緘の鎧着て、白葦毛なる馬に沃懸<sup>いつかけち</sup>地の鞍置いて乗りたりけるが、中にへだたり、返しあはせ、返しあはせ、戦ひけり。(中略)

三位入道は、釣殿にて長七<sup>となふ</sup>唱を召して、「わが首取れ」とのたまへば、唱、涙をながし、「御首、ただいま賜はるべしともおほえず候。御自害だに召され候はば」と申ければ、入道、「げにも」とて、鎧脱ぎ置き、高声に念仏し給ひて、最後の言こそあはれなれ。

むもれ木の花さくこともなかりしに

みのなるはてぞかなしける

と、これを最後のことばにて、太刀のきつ先を腹に突き立て、たふれかかり、つらぬかれてぞ失せ給ふ。このとき、歌詠むべうはなかつしかども、「若きよりあながちにもてあそびたる道なれば、最後までもわすれ給はざりけり」とあはれなり。首をば、唱泣く泣く掻き落とし、直垂の袖に包み、敵陣をのがれつつ、「人にも見せじ」と思ひければ、石にくくりあはせて、宇治川の深きところに沈めてけり。

新潮日本古典集成『平家物語 上』(新潮社)<sup>8)</sup>

戦乱の全体像を物語ろうとする『平家物語』の叙事的趣向について、頼政の死を中心課題とする謡曲と比較しつつ、生徒たちに理解させておきたい。『平家物語』において、戦乱の一つの帰結点として描かれる頼政の死は、死後の亡者として語られ始める謡曲の世界観とは対照的である。また、『平家物語』が語る戦乱の全体像に対して、謡曲が、時系列に従って進む本来の叙述構成を転換させることで、あくまで頼政個人の死に焦点を絞ろうとしたことも読み取られるだろう。頼政という人物への焦点化、それこそが、頼政という人物を、芸能や伝承、物語の主人公として一人歩きさせていく大きな転換点でもあったのである。

なお、本来であれば、『平家物語』巻第四「鶴」に語られる頼政の武勇と歌才のエピソードや、「源平盛衰記」巻十六「菖蒲前事」<sup>9)</sup>に語られる愛妾、菖蒲前との恋の逸話などについても、取り上げたいところではある。しかしながら、おそらくは時間数の都合上、難しいであろう。教授者による口頭説明で、それらの概略については述べておくべきものと考え。謡曲に先行する頼政の物語的イメージが理解されればされるほど、亡者となって現れる謡曲の頼政の哀れさがよく読み取られるようになるからである。

4・5節における読解を通じて、中世前期(鎌倉期)から後期(室町期)にかけての頼政像の変遷については理解が深まるものと思われる。しかしながら、そこに止まっている限りにおいては、前節に述べた「『頼政』が近代・現代でも盛んに上演されていること」の理由を探ろうとしても、その答を見いだすことはできない。近代に至るまでに横たわる江戸時代の状況に対する視点が、全く欠落していることに問題があろう。ここに、単なる文学的享受論に止まら

ないための、文化史的観点導入の必要性があるのである。具体的には、次節では、浄瑠璃・歌舞伎といった芸能面、そうした舞台を絵画化した浮世絵・錦絵、観光が盛んとなった江戸期に多く刷られた名所図、といった江戸文化に対する考察を通じて、欠落している江戸時代における頼政像を探ることになる。

あらかじめ生徒たちには、「《頼政》が近代・現代でも盛んに上演されていること」の理由について、江戸時代の頼政に対するイメージの変遷と結びつけて考えさせてみたい。おそらくは容易に、「江戸時代には、芸能や物語を通じて、頼政のイメージがさらに豊かになり、その人気が高まっていたのではなかろうか」という仮説を導くことができるであろう。次節の学習は、その仮説を検証するための作業となるのである。

## 6 展開（３）—江戸時代の頼政人気についての調査

### 【１】歌舞伎・浄瑠璃の上演状況の検討から

本課題においては、「アート・リサーチセンター 歌舞伎・浄瑠璃データベース」（立命館大学）における「歌舞伎・浄瑠璃興行年表」<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/dbroot/kabuki.htm>を活用する<sup>10)</sup>。当データベースは、「上演年」や「上演場所」等、様々な条件で検索可能なものである。本授業では「演目」欄から検索する。「頼政」の後に「\*（アスタリスク）」を付し、「頼政\*」と入力して検索すれば、興行名冒頭だけでなく、興行名の中に「頼政」が含まれるデータも検索することができる。ヒットした57件を対象に、「整列条件」の「西暦順」を選択し、再検索すれば、演目を時代順に示すことができる。生徒たちには、必要なデータを摘記して、ワード等のワープロソフトの上でまとめさせておくのがよいであろう。

データを集約し、まとめることができたならば、まず、頼政関係歌舞伎・浄瑠璃の、江戸時代における上演回数の変遷に注目したい。明治期の1件を除き、江戸時代（1603年～1868年）を対象とする。もっとも遡る例は「女鶴艶頼政」で元禄12年（1699）であり、もっとも下る例は「頼政鶴物語」で安政6年（1859）である。以下、およそ50年ごとに区切って整理してみよう。

#### 18世紀前半まで【件数22】

元禄12年（1699）×2、元禄13年（1700）、元禄15年（1702）、元禄17年（1704）、宝永4年（1707）、宝永5年（1708）×2、宝永6年（1709）、正徳2年（1712）、正徳3年（1713）、正徳4年（1714）、正徳5年（1715）、享保6年（1721）、享保8年（1723）、享保9年（1724）×4、享保12年年（1727）、享保13年（1728）、享保19年（1734）、

#### 18世紀末まで【件数3】

宝暦元年（1751）、明和4年（1767）、寛政2年（1790）、

#### 19世紀前半まで【件数21】

文政4年（1821）×2、文政5年（1822）×7、文政6年（1823）×3、文政10年（1827）×2、文政11年（1828）、天保7年（1836）×3、天保13年（1842）×3、

#### 幕末まで【件数9】

嘉永4年（1851）×3、安政3年（1856）×2、安政5年（1858）×3、安政6年（1859）

生徒たちには、「日本史」学習における江戸時代の文化史を再確認させる必要があるが、

(1) 江戸時代を通じて、脈々と頼政物の上演が続いていること。

(2) 江戸前期のいわゆる元禄文化の頃、後期の化政文化の頃、と二つのピークがあること。

以上の2点に気づかせたい。

次に、演目の変遷について、考察してみよう。データベースの「興行名」「外題」から、各時期に演じられた演目が把握される。18世紀初頭までは、「女鶴艶頼政」「頼政万年暦」「頼政蓬莱山」「頼政御前能」「頼政五葉松」「浮[好-子+背] 鶴頼政」「頼政式三番」「元服鶴頼政」「福藁弓勢頼政」「頼政大極的」「金冠婚礼頼政」「弓始鶴頼政」「頼政会稽山」といったように、様々な演目が単発的に演じられている。一方で、18世紀初頭以降になると、「頼政射家桜」や「英勇茲頼政」も何回か混じるものの、ほぼ「頼政追善芝」→「頼政扇子芝」→「頼政鶴物語」という流れで、各演目が幾度も繰り返して上演されるようになる。このうち、「頼政追善芝」と「頼政扇子芝」は異名同作品であるので、頼政物としては二つの作品が大当たりを取って、定番化したことがわかる。以上から、

(1) 江戸前期には様々な作品を通じて、多様なイメージで伝えられた頼政像が、後期になるとほぼ二つの作品が伝えるイメージへと収斂した。

(2) 江戸後期の二つの作品は、長期間にわたって何度も上演されており、頼政のイメージは、この時期、『平家物語』や能以上に、こうした芸能を通じて人々に広く認識されるようになった。

といった点に気づかせたい。

歌舞伎・浄瑠璃の各演目について詳細に調べることは、事典類の活用で、ある程度は対応できるものの、時間的制約もあって実際には難しいだろう。公刊されているテキストも限られているし、注釈等も十分に施されていない。各作品の内容に踏み込むことは控え、次に、各演目が浮世絵・錦絵に絵画化され、視覚的なイメージも伴うかたちで、頼政のイメージが広がっていたことに生徒たちの目を向けさせたい。

## 〔2〕絵画的イメージの検討から

本課題においては、「演劇博物館浮世絵閲覧システム」(早稲田大学) <http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/enpakunishik/search.php>を活用する。当データベースの「全項目」欄に「頼政」と入れて検索すると、42件がヒットする。さらに、「整列条件を追加」の条件に「年代順」と入れて再検索し、その上で、上部のタブの「簡易情報付一覧」を選択すると、「上演年」等、基本的な書誌的情報が明記された画像を一覧することができる。

最初の10点は、発行年が特定されないものなので、11点目の文化6年(1809)の絵から元治元年(1864)のものまで、江戸期の絵について、発行年代を確認させ、前節同様に整理させてみたい。次に、江戸期のデータについて、一覧しておこう。

文化6年(1809)×6、文政4年(1821)×3、文政5年(1822)×3、天保7年×3(1836)、嘉永4年(1851)×2、安政元年(1854)、安政5年(1858)×3、元治元年(1864)×2  
浮世絵を通じて、頼政のイメージの広まったのが、江戸時代後期、化政文化以降であること



が確認されよう。また、当データベースの検索結果には、明治期の錦絵8点も含まれている。近世の頼政イメージが、近代に受け継がれたことを実感する上で有益である。

次に、生徒たち自身で、興味の引かれた絵を拡大して鑑賞し、頼政の人物像について、グループ内で相談したり、議論したりさせておきたい。絵には、頼政のみならず、郎等の猪ノ早太や妻の菖蒲御前等もクローズアップされ、活写されている。同じ版が重版されたものや、2枚、3枚がセットであるものもある。頼政を取り巻く人々のイメージも踏まえつつ、頼政の人物像について認識を深めるよう努力するよう促したい

また、「外題」を見れば、「頼政鶴物語」等、前節で確認したものと共通した演目も確認できよう。こうした絵画的イメージを目にすることで、頼政と彼を取り巻く人々が、いかに英雄的に認識されていたか理解することができようし、生徒それぞれ独自のイメージ形成にも有用であろう。

以上、二つの課題学習を通じて、江戸時代における頼政の英雄的イメージの広がりが多角的に理解されてくるはずである。次は、視点を変えて、《頼政》で印象的な「扇芝」のイメージについて、確認させておきたい。

### 〔3〕観光絵図の検討から

本課題においては、国際日本文化研究センター「古地図関係データベース」を用いる。

最初に、「平安京都名所図会データベース」<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/meisyozyue.html>によって、江戸期に認識された平等院の姿を確認してみよう。五十音別検索「ひ」→「平等院」項目の「都名所」→「図会へ」と進めば、画像を見ることができる。当『都名所図会』は墨摺六冊本で、安永9年（1780）に刊行され、名所図会本の先駆となったものである。平等院境内図には、「扇芝」「釣殿観音」「駒つなぎ松」「鎧掛松」「頼政墓」が確認され、頼政の「史跡」と平等院がいかに深く結びついていたかが、容易に見て取られるであろう。ちなみに、近世以前の平等院の縁起類に、これら頼政ゆかりの「史跡」が語られることは、管見の限り見受けられない。江戸期以降の頼政像の拡大に伴う現象といってよいだろう。

次に、現代の平等院のホームページ「世界遺産 平等院」<http://www.byodoin.or.jp/>を参照したい。「平等院探訪」から「平等院マップ」に進むと、境内の案内図がある。そこで案内される頼政の史跡は、「頼政の墓地」「扇の芝」の二カ所のみであり、現代ではすでに頼政のイメージと平等院との結びつきが薄まってしまっていることがわかる。それは、寺院側の意識の問題のみならず、平等院を訪れる観光客（一般庶民）の意識をよく反映したものでもであろう。そういう意味では、現代人である私たちの方が近世の人々よりも、より貧困なイメージの中でしか《頼政》という能を楽しめていないことにもなる。芸能が「古典芸能」と称されるようになり、敷居の高いものと見なされる所以でもある。

次に、国際日本文化研究センター「古地図関係データベース」に戻って、「所蔵地図データベース」<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/syozou-map.html>を検索してみよう。「サイト内検索」に「京大絵図」と入力すると、制作時点である貞享三年（1686）当時の京の全体地図を見ることができる。その中には、当時の人々に馴染みのあった神社仏閣などがランドマー



クとして図入りで書き込まれている。宇治の辺りを探すと、「平等院 後冷泉院永承六年 建立御堂関白頼通公」と平等院が紹介されているのだが、その傍らに「扇芝」と大きく記され、そこに扇形の図が伴っているのがわかる。このような扱い方が、当時の他の同種地図にも見ることができる。例えば、同データベースで公開されている寛政頃（1789～1800）成立「京都図」には、「平等院鳳凰堂」の傍らに「コマツナキ松」「芝」（扇形の図）「ツリ殿」「ロウ門」とある。当時の平等院が、一般に流布していた頼政の英雄的イメージを最大限に活用しながら、参拝客や観光客を集めていたことが、生徒たちにも理解できるであろう。

以上、各種機関に公開されたデータベースを活用した調べ学習のモデルについて、解説してきた。江戸時代における頼政のイメージが、中世に比べてどのように変化したか、という疑問に答えるための方策は、ある程度示すことができたものと考えている。

## 7 総括—謡曲《頼政》再読

最後に、もう一度、謡曲《頼政》の読解に立ち戻って、本授業を締めくくる必要がある。生徒たちは、本授業計画前半において、すでに謡曲における頼政のイメージが、本説である『平家物語』のものとは変化していることに気づいていた。本授業計画の後半では、謡曲によって変化が加えられた頼政のイメージが、江戸時代ではさらにどのように変化するのか、データベース類を活用した調べ学習を通じて理解してもらいたい。

ここで肝要なのは、「変化」を知ること自体を目的とするのではなく、江戸時代の人々が、どのような前提で（あるいは無意識のフィルターを通じて）、謡曲《頼政》を鑑賞していたかについて、想像することである。先にも触れたことだが、多角的に形成された頼政の英雄的イメージが一般的であったならば、同じ《頼政》を鑑賞したとしても、そこから受ける感慨は、現代の私たちと大きく異なっていたであろうことが理解されよう。

もし、授業計画に余裕があれば、以上のような学習を踏まえた上で、生徒たちに能楽堂で《頼政》を鑑賞することをすすめたい。それは難しい場合は、こうした学習を踏まえ、謡曲《頼政》を文学的テキストとして再読するだけでも、十分に意味はあるはずである。江戸時代における頼政のイメージの展開は、言うなれば荒唐無稽なものではある。しかしながら、そうした文化史的背景があつてこそ、謡曲《頼政》が訴える頼政の悲哀は、よりいっそう人々の胸に響いたのである。初読の際には、《頼政》を退屈に感じた生徒もいたかもしれない。そうした生徒ほど、再読した際、自分自身の読みの変化に気づかされることであろう。

## おわりに

古典とされ、教科書に載るような文学作品は、今に伝わるまでに多くの時代を経ている。生徒たちにそれを「教える」立場の教授者は、その作品を、それが生まれた時代にのみ固定化して扱いがちな面もあるように思われる。しかしながら、古典が伝わる背景には、その古典が、時代の中で様々に読み替えられ、再解釈されながらも、次代に伝えるに足る意味を失わなかった、という文化史的背景があることを忘れてはならない。本授業案は、近年の古典文学研究で共有されつつある、こうした問題意識を、高等学校「国語」の学習を実践する教室で取り組む

ことができないか、と考えて提示する試案である。大方のご批正を賜りたい。

〔註〕

- 1) 『創造された古典—カノン形成・国民国家・日本文学』 ハルオ シラネ他編 新曜社 (1999)
- 2) いずれも2009年3月、文部科学省刊
- 3) 代表的な研究として、『和漢朗詠集』や『史記』の注釈書が中世以降の文学の広く影響を与えていたことを明らかにした黒田彰氏の研究がある。『中世説話の文学史的環境』(和泉書院・1987)『中世説話の文学史的環境・続』(和泉書院・1995)等。
- 4) 韻文・中古物語の分野で代表的なものとして、片桐 洋一氏を中心となって進めてきた『古今和歌集』や『伊勢物語』の中世から近世にかけての注釈書が、近年、集大成されていることが挙げられる。『伊勢物語古注釈大成』(笠間書院・2005～)『伊勢物語古注釈書コレクション』(和泉書院・1999～)。また、近世に及ぶ軍記物語の評釈活動については、今井正之助氏『『太平記秘伝理尽鈔』研究』(汲古書院・2012)が挙げられる。
- 5) 上野俊哉・毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ入門』(ちくま新書・2000)
- 6) 謡曲《頼政》の読解に入る前に、前節の調べ学習の続きとして、謡曲作品としての「頼政」を調べさせておいてもよい。代表的なものを次に挙げる。  
『日本古典文学大辞典』「頼政」  
謡曲。二番目物。夢幻能。五流現行曲。世阿弥作(申楽談儀)。古名「源三位」「宇治頼政」とも。【梗概】旅僧(ワキ)が、宇治の里の老人(前シテ)から名所・旧跡を教えられ、昔源三位頼政が自害した平等院の扇の芝に伴われる。老人は、今日が宮<sup>みや</sup>軍に当たる日で、自分は頼政の幽霊と名乗るやいなや姿を消す(前場)。旅僧が扇の芝を片敷いて待つところへ、法体に甲冑を帯して現れ出た頼政の幽霊(後シテ)は、僧に読経を頼み、治承四年(一一八〇)五月二十六日、高倉宮以仁王を戴いて都を出で、平等院で平家の大勢と戦って敗れ、辞世をよんで自害したことを語り、姿を消す(後場)。【素材・趣向】『平家物語』巻四に依拠する。後シテは「頼政」の専用面を用いる。世阿弥の代表的な軍体の能。浄瑠璃『源三位頼政(扇の芝)』『頼政追善芝』などに影響が認められる。  
下線を付したように、江戸期の芸能には、『平家物語』からの直接的な影響よりも、謡曲《頼政》の影響の方がむしろ大きい面もある。こうした芸能史的位置づけも、後に調べる享受の様相につなげるために、予め学習しておいてもよいだろう。
- 7) テキストとして、新編日本古典文学全集を紹介したのは、もっとも入手しやすいものであるとともに、古典文に現代語訳を付したものであるからである。本授業案では、読解の過程で文法的説明を施す余裕はない。生徒たちの学習到達度に合わせて、現代語訳を参照させながら、授業を進めてもよからう。
- 8) テキストに新潮日本古典集成を取り上げたのは、比較的入手しやすいテキストであることと、原文では、古典文の難解箇所傍らに、適宜、現代語訳を付したものであることによる。前節で取り上げたテキストには全文現代語訳が付くのだが、本テキストは部分訳である。生徒たちの学習到達度がある程度高い場合には、こうしたテキストを教材としてもよい。
- 9) 「源平盛衰記」のテキストとして、比較的入手しやすいものには『新訂源平盛衰記』(新人物往来社)がある。現代語訳には、『完訳源平盛衰記』(勉誠出版)がある。
- 10) 以下、各データベースの状況は、2012年3月末時点のものである。